

## 「東国への仏教伝播」 関東初の押出仏



▲出土した押出仏

関峯崎横穴群は、香取市関字峯崎と成田市堀籠字峯崎との境に沿って所在します。古墳時代後期から8世紀はじめごろまで営まれた北総地域最大の横穴群で、その数は100基以上と推

定されています。横穴は「おうけつ」とも呼ばれ、古墳時代後期に顕著な埋葬施設の一つで、山腹や台地の縁辺部に横から穴を掘って墓室をつくったものです。

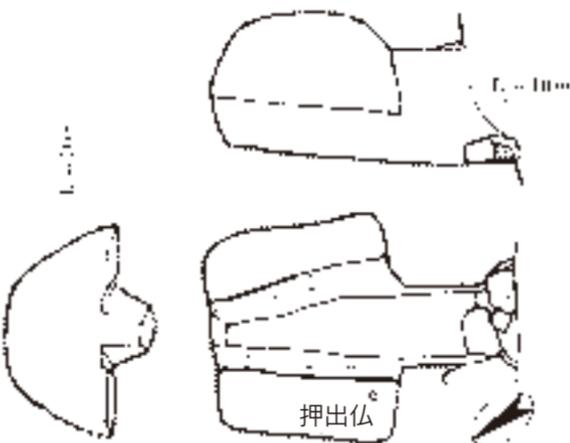
昭和62年に実施された発掘調査で、3号横穴から押出仏が発見されました。押出仏が発掘調査で発見されたのは関東地方では初めてであり、しかも横穴からの出土は全国でも他に例がなく、マスコミにも取り上げられて大変話題になりました。

押出仏とは薄い金属板を浮き彫りの原型の上のせ、木槌などで打ちたたいて型の凹凸を写し取る技法、または、この技法でつくった仏像をいいます。この技法は中国から朝鮮半島を経て6、7世紀にもたらされ、畿内では7世紀後半にさかんにつくられました。本押出仏は、後屏に両脇

侍像を配した金銅製如来三尊像です。中尊および両脇侍像はそれぞれ別に打出され、鍍金（金メッキ）仕上げの後、鋏留されています。後屏は、厚手の銅板を蓮弁形に成形し、両面を鍍金仕上げしています。基部に柄をつくり出して、台座にはめ込むようにしています。現存高16・9cm、現存幅14・9cm、厚さ0・8mm。火焔付円形頭光を負った中尊は、体部の大半と台座を欠失していますが、全体のバランスから坐像と推定されます。厚さ0・4mm、頭部長2・8cm、頭部張2・5cm。

両脇侍像はともに宝珠形頭光を負って、蓮茎付蓮華座に侍立しています。左脇侍像（向って右）は、右手を胸前に上げ、左手を腰下に置いています。この形は観音菩薩像を意識しているようにも見えます。厚さ0・4mm、全高6・45cm、最大幅2・6cm。中尊には豊かな頬にあどけなさが認められ、両脇侍像も童顔に表されていることなどからみて、7世紀後半に制作されたと考えられます。また、制作技法からみても、当地方でつくられたというよりは畿内で制作されたとみて差し支えないでしょう。

枕辺に阿弥陀如来  
もし、左脇侍像が観音菩薩像であれば、中尊は阿弥陀如来であり、本押出仏は阿弥陀三尊像ということになります。おそらく、この仏像は、被葬者が生前厨子に入れて礼拝していたものと思われれます。死後、阿弥陀如来の浄土に生まれることを願って、枕辺に置かれたのではないでしょうか。関東地方では初見例であり、東



▲3号横穴の図

国への仏教伝播を考えるうえで大変重要かつ貴重な事例といえます。平成19年7月3日付で市有形文化財（考古資料）に指定されました。